

## バッハ没後 250 周年記念講演会

作曲家ヨハン・ゼバスティアン・バッハの没後 250 年にあたる 2000 年には、世界中で記念行事が行われましたが、獨協大学でも「オープンカレッジ」の特別講演会というかたちで、記念講演会が催されました。講演会は 4 部構成で、最初に関徹雄獨協大学教授(現名誉教授)の挨拶があり、続いてバッハに関する二つの講演がそれぞれ日本語および通訳付きのドイツ語で行われました。二つの講演の合間には、獨協大学管弦楽団によるバッハの管弦楽作品やマーラーによるバッハ編曲が演奏されました。最初の講演では、キルステン・バイスヴェンガーが『バッハ、それは誰なのか』というテーマを、メインとなる講演ではゲストであるマルティン・ゲック教授が『19 世紀におけるバッハ・ルネッサンス』というテーマを扱いました。(本紀要では最初にゲック教授の講演、続いてバイスヴェンガーの講演が掲載されています。)

音楽学者マルティン・ゲック教授(現ドルトムント大学退任教授)は、博士号取得の後、1966 年から 1970 年までミュンヘン版リヒャルト・ヴァーグナー全集の発起人かつ編集者となりました。その後、1976 年までシュトゥットガルトのエルンスト・クレット教科書出版社の編集者として活動しています。1975 年、ドルトムント大学で教授資格を取得、1976 年に同大学の音楽学と音楽教育学の教授に就任しました。研究の重点は 17 世紀から 19 世紀の音楽史ですが、とりわけヨハン・ゼバスティアン・バッハの生涯と作品に関する著作は、大きな位置を占めています。最新の研究成果はバッハ・イヤー 2000 年に出版された „Bach. Leben und Werk“ (ハンプルグ・ローヴォルト出版)であり、日本語訳も出ています。(『ヨハン・ゼバスティアン・バッハ』全 4 巻、小林義武監修、鳴海史夫、大角欣矢共訳、東京書籍、2001 年)。

この講演会は獨協大学の関係諸氏のご協力なくしては開催することができなかったことでしょう。イニシアティブを取ってくださったのは関徹雄先生でし

た。翻訳は矢羽々崇助教授にご担当いただきました。当時の広報課(現総合企画課)が講演会全体の組織実行にあたってくださいました。関係者の皆様にこの場を借りて心から感謝の意を表します。

キルステン・バイスヴェンガー

(訳: 矢羽々崇)